

市内河川魚類生息状況調査結果(令和4年度)

項 目	調 査 結 果
① 調査時期	春季調査 令和4年5月～6月(5日間) 夏季調査 令和4年8月(5日間) 秋季調査 令和4年10月～11月(5日間) 冬季調査 令和5年2月～3月(5日間)
② 調査場所	大阪市内河川 19地点
③ 調査結果の概要	ア. 確認された魚種は45種で、前回調査(平成29年度調査、以下同じ。)と比べて7種減少しました。うち在来種については42種で、前回調査と比べて4種減少しました。
	イ. 確認種数(在来魚、外来魚合わせた種数)が多かった地点は、神崎川上流(17種)、大和川(15種)、淀川下流(14種)、淀川上流(13種)、大川(12種)でした。
	ウ. きれいな水質の河川にすむ魚の確認地点数は9地点であり、前回調査(10地点)とほぼ変わらない結果となりました。
	エ. 大阪府レッドリスト2014において絶滅危惧種として記載されている、カワヒガイ(絶滅危惧Ⅰ類)が神崎川上流で、ニホンウナギ(同Ⅱ類)が淀川下流で、ミナミメダカ(同Ⅱ類)が大和川で、生息が確認されました。また、大川でシロヒレタビラ(同Ⅰ類)が平成13年度調査を最後に確認されていませんでしたが、久しぶりに確認されました。また、神崎川下流・尻無川河口では、初めてきれいな水質の河川にすむ魚が確認されました。
	オ. これまできれいな水質の河川にすむ魚が確認されていた大和川においては、大規模な治水工事などにより生息状況が変化したこと、きれいな水質の河川にすむ魚が確認できなかったと考えられます。
	カ. 外来種については、オオクチバス(ブラックバス)は4地点(前回調査5地点)で、ブルーギルは5地点(前回調査6地点)で確認されており、前回に比べ生息範囲が狭まりましたが、市内河川全体の個体数は増加していました。なお、前回確認されたコクチバスは確認されませんでした。
④ 河川ごとの特徴	《神崎川》 上流域では、前回調査に引き続き、きれいな水質の河川にすむ魚であるコウライモロコが最も多く捕獲されました。また、ブルーギルなどの外来種については、前回から大きな変化はありませんでした。 下流域では、ボラ、スズキ、キチヌなどの汽水性海水魚が最も多く確認されました。
	《淀川》 上流域では、前回調査で確認された在来種であるオイカワの個体数が激減し、ブルーギル、オオクチバスなどの外来種による脅威が増加している可能性があります。 下流域では、ボラ、マハゼなどの汽水性海水魚が最も多く確認されました。
	《寝屋川・第二寝屋川》 寝屋川では、比較的汚濁に強いボラが多く確認されました。また、初めてニゴイ属が確認され、在来種であるオイカワ、モツゴ、ギンブナについても引き続き確認されました。第二寝屋川では、ボラ、コイの2種が確認されました。
	《平野川・平野川分水路》 前回調査に引き続き、ボラなどの比較的汚濁に強い種が多く確認されました。平野川分水路では、タモロコ、オイカワが確認されるなど水環境の改善が見られました。
	《大阪市内河川》 大川ではオオクチバスの個体数が増加するなど、ブルーギル、オオクチバスなどの外来種による脅威が増加している可能性があります。 道頓堀川では、きれいな水質の河川にすむ魚であるコウライモロコが前回調査同様に確認され、魚種数が増えるなど良好な方向へ向かっていると推測されます。また、別の調査ではニホンウナギが確認されています。 安治川、尻無川、木津川など汽水域では、スズキ、ボラなど汽水性海水魚が多く確認されました。また、きれいな水質の河川にすむ魚であるイシガレイやハゼ類などの底生魚が確認されるなど良質な水質状況が維持されています。一方で、底質にヘドロが残っている地点もあることから、魚類生息状況をさらに向上させるためには底質の今後の一層の改善が必要と考えられます。
	《大和川》 前回調査と比較して、種類及び個体数とも減少しています。 溶存酸素など水質データは良質な水質状況が維持されていますが、調査地点付近では、大規模な治水工事による岸際の樹木伐採や護岸整備がなされ、岸際の状況が変化したこと、きれいな水質の河川にすむ魚が確認できなかったと考えられます。